

プロダクトデザインコース

飯田晴彦

Haruhiko Iida

デザイン学科 教授

所属団体学会

公益社団法人 日本インダストリアルデザイナー協会

STUDIO RAGAZZO / 主宰

日本工学教育協会

日本機械学会

RIST (くまもと技術革新・融合研究会)



専門分野

製品デザイン

プロダクトデザインは人々の生活をデザインする領域です。

プロダクトデザインは領域で考えれば製品をデザインする分野ですが、モノだけをデザインするのかと言えばそうではありません。モノには使用する人との接点があり、それをインターフェイスと言います。インターフェイスにはいろいろあります。画面であったりボタンの形状であったり、使いやすい形など多く存在します。これらのインターフェイスをデザインするのもプロダクトデザインの領域になります。よくいわれるデザイン思考もプロダクトデザインの考え方を基にしています。

また、近年ではモノと関連したユーザー体験を創造することも重要と考えられるようになりました。どうすればユーザーに使ってもらえるのか、長期にわたって使いやすいということはどうやって実現するかなど、ユーザーが必要とするサービスを提供する考え方である「サービスデザイン」もプロダクトデザインと言えます。人々の生活には多くのモノや空間、そしてサービスが存在します。そのすべてを領域としているのがプロダクトデザインなのです。

プロダクトデザインは私達の生活のすべてをデザインします。サービスやユーザー体験など、モノだけのデザインではないのです。

飯田晴彦 (教授、プロダクトデザイナー、デザインディレクター)

小さい頃からモノにこだわりがあったり、モノを作ることが好きだったり、人や社会のために何か役に立つ仕事がしたいとか、そういう想いを持っていればプロダクトデザインを勉強するには十分です。デザインでより良い未来を創造していきましょう。

卒業研究・指導作品 卒業研究では自らテーマを設定し研究します。授業では実際に使用できるモノを製作します。



樹種の特徴を活かしたプロダクト提案



親子のコミュニケーションをサポートするプロダクトの提案



新しい電動カートのデザイン提案



EVカーレース車両カウルデザイン



日本伝統の木組みを使った組み立て家具の提案

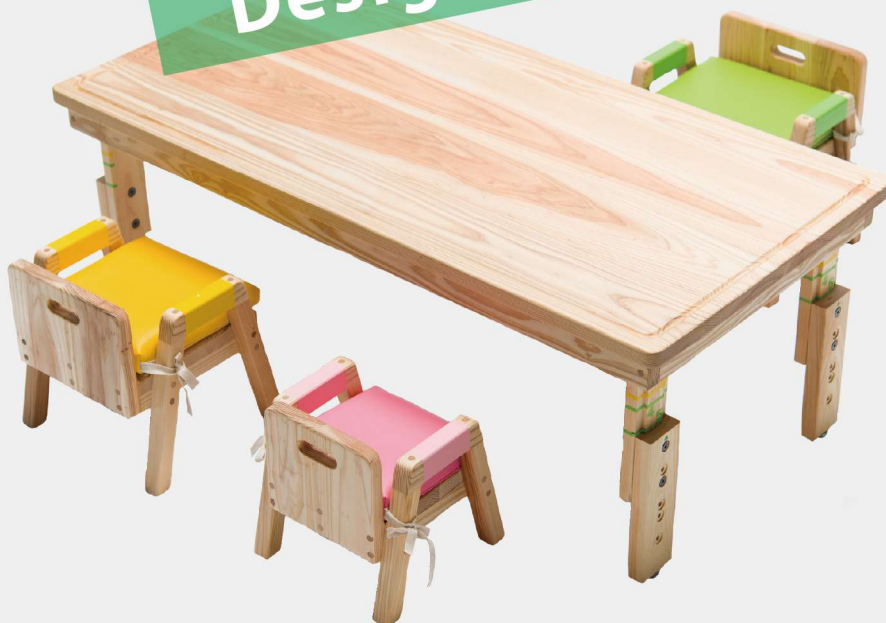


植物の意匠を再構成した椅子のデザイン



材料のしなりをつかった椅子

Product Design



植物の意匠を再構成した椅子のデザイン



スピーカーデザイン

製品デザインスタジオ

プロダクトデザインコースの中には製品デザインスタジオと空間デザインスタジオがあります。製品デザインスタジオでは名前の通り、製品をデザインすることを学びます。家電、家具、雑貨、PC、楽器、時計、オーディオ、照明ステーショナリー、自転車、バイク、車など生活環境に存在する多くの製品が対象です。手に触れることができるデザインであり、形状だけでなく、使用者の使い方、満足など多くの要件を満たす必要があります。そのため、デザインをするには良い生活者の視点で物事を観察する視点が必要になります。ただ、形が美しい、面白い、だけではデザインは完成しません。人々の生活の役に立つこそデザインなのです。



飯田研究室



学外プレゼンテーション



京都 島津製作所企業見学



レンダリングの練習



3DCG

製品デザインの授業では、観察し、問題を発見、調査分析からアイデアを形にして提案することを学びます。デザインには多くのスキルと経験と知識が必要です。

実際に体験する事が大事！

実際の授業では、プロダクトデザインの講義やスキルとしてのレンダリングや3DCGなどの他に、学外での活動として現地調査、コンペ、プレゼンテーション、企業見学など出かける機会も多くあります。



2年次 時計デザイン



博多駅での学外展示



SAJIKAGEN



FLOWER ASHITSUBO



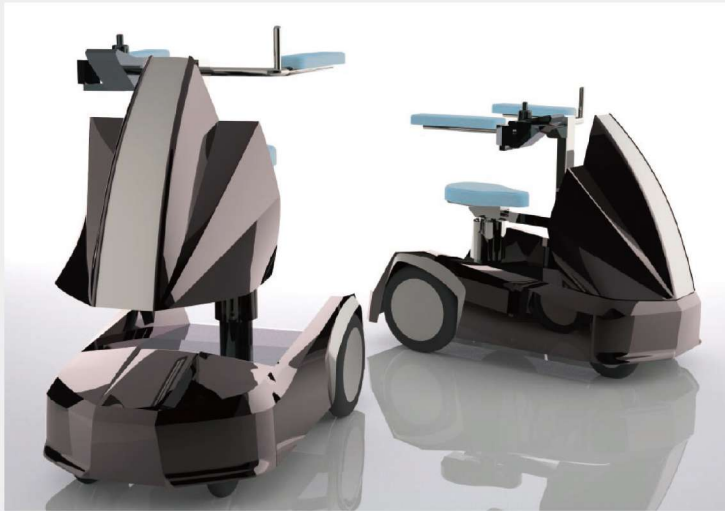
MUGCUP



NAS SYSTEM KITCHEN



HOSPITAL INTERIOR & MACHINE DESIGN



F-CITE STAVI



CELLPHONE KOMON



OFFICE INTERIOR for EXECUTIVE

デザインの未来

デザインは概念としてのDデザインと領域としてのdデザインが相互に役割を果たすことで、これからの世界には必要不可欠なものとなります。Dデザインとはデザインを様々な問題解決に利用するデザイン、dデザインは、プロダクトやグラフィックといったこれまでのデザインです。世の中の変化と共に、自身のデザインも変化し、これまでの造形的なデザインだけでなく、企業そのものをデザインするような領域まで広がっています。